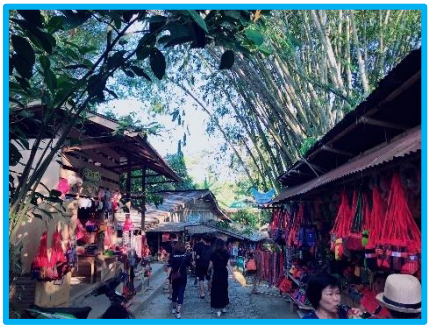

トラジャ Ex. 2018

報告書

目次

トラジャEx.概要（目的,協力者）	2
参加者リスト	2
日程	2
日別活動報告	3~12
フリーテーマエッセイ	13~22
持ち物推奨品	23
注意点	23

【トラジャ Ex 概要】

・目的

トラジャの文化、並びにインドネシアの文化に触れることを通して、価値観を広げる。
異文化を持つ学生同士の交流を楽しむ。

・協力者

マルセルさん
バルバラさん
ハサヌディン大学の皆さん
サダン村の皆さん

【参加者リスト】

	学年	支部	大学	役職
丹原菜々子	4	岡山	ノートルダム清心女子大学	副団長, 広報
三宅希実	4	岡山	ノートルダム清心女子大学	文化紹介, 広報
吉田庄吾	3	名古屋	南山大学	団長
唐井優利花	2	岡山	ノートルダム清心女子大学	報告書
原田寛人	2	岡山	岡山大学	合宿
福森大祐	2	神戸	甲南大学	合宿, 勉強会
葛原和希	1	東京	中央大学	財務
小泉星	1	東京	淑徳大学	文化紹介
林ももか	1	大阪	関西大学	国際渉外

【日程】

2018 年 9 月 6 日～2018 年 9 月 14 日

9月6日	マカッサル到着
9月7日	ハサヌディン大学の皆さんと文化交流
9月8日	ハサヌディン大学の皆さんとマカッサル観光
9月9日	マカッサルからトラジャに移動
9月10日	パラワ村 お葬式見学 ケテケス村
9月11日	水牛の市場 市場見学 孤児院訪問
9月12日	マネネ祭り跡見学 コーヒー屋 市場で買い物
9月13日	市場で買い物 高校訪問 フェアウェルパーティー
9月14日	トラジャからマカッサルに移動

【日別活動報告】

9 月 6 日（1 日目）@マカッサル　　担当：吉田庄吾

前日に羽田空港を出発し、同じインドネシア内のスカルノハッタ国際空港を経由、昼の 13 時頃に目的地であるハサヌディン空港に到着。手続きを済ませ荷物を受け取り、その後すぐにコーディネーターであるマルセルさんと合流する。気温はおそらく日本と同じ程度だが、湿度が高くないため快適な印象を受けた。マルセルさんと合流し、すぐに荷物を車に積み、滞在するホテルに向かう。車に乗り込む前から気にはなっていたが、やはり東南アジアは車のマナーが悪い。日本では滅多に鳴らすことのないクラクションも、インドネシアでは事あるごとに鳴らす。これで事故が防げるなら仕方がないことだが。また、車をよく見ると日本のメーカーの車が多い。しかし日本と違い MT の車がほとんどだった。AT の車だとエンストした時に大変だからだそうだ。その後、空港の敷地内にある空港名にもなっている英雄ハサヌディンの像の前で写真を撮り、ホテルへと車を走らせる。空港の敷地内では気にならなかったが、敷地内を出た途端、高速道路は渋滞気味。マカッサルはインドネシア内でも屈指の港町ということで、荷物を積んだトラックがゆっくり走っているからなのだろうか。渋滞した高速道路を降り、やっとホテルがありそうな市街地に入ったのだが、そこでは先ほどまでの高速道路とはまるで違う光景が目に入る。写真は市街地の道路の光景であるのだが、とにかくバイクが多い。インドネシアが世界でも有数のバイク大国ということは知っていたが、ここまでとは想像していなかった。車体の小さいバイクにすり抜けられるのを防ぐために、車は車間距離をギリギリまで詰めて運転する。それに加えて、信号が 1 つもない。運転手の方が日本語を少し喋れる方だったので、なぜ信号がないのか聞いてみたが、まず信号という言葉が伝わらなかった。日本では当たり前にある信号がインドネシアではほとんど無い。10 日間の E x.期間中、信号を目にしたのはほんの数回であった。そんな道路でも事故が起こりそうな感じはしない、そのあたりの譲り合いは出来ているように感じた。

その後ホテルに無事到着し、チェックインする。部屋は綺麗で日本のそこそこのホテルと大差はないように感じて一安心。長い移動に疲れたため少しの間睡眠をとり、その後数人で夕食に向かう。現地では人気そうな混雑したレストランに入店、ここで始めてのインドネシア料理。6 人テーブルで食事をしたのだが、想像以上に料理が出てくる。内容は、日本でいうかまぼこのようなものと、魚の姿焼き、ナシゴレン、ミーゴレンなどとても種類が豊富。また 1 人 1 つフルーツジュースを沢山ある種類のなかから自由に選んで飲んだ。どれも美味しく、日本では馴染みのない料理ばかりでとても満足。ただこれから毎食これとほぼ同じ料理を食べることになるとは思ってもいなかった。ここだけの話、3 日目あたりで自分はインドネシア料理に飽きた。夕食を食べている最中に何人かが合流し、その後夕食を済ませホテルに帰るとメンバーはほぼ揃っていた。翌日にハサヌディン大学で文化紹介を控えているため、そのミーティングをし、大富豪などをしてその夜は楽しんで、1 日目は終了した。

9月7日（2日目）@マカッサル　　担当：原田寛人

この日はハサヌディン大学の学生との交流をしました。まず朝、ホテルからハサヌディン大学まで車で行きました。大学は大きな池などもあり広大の敷地を有していました。

大学に到着してから、まずはインドネシアの遊びをしました。日本の「パン食い競争」に似たゲームで、つるされたお菓子を食べた後に腰からぶら下げたペンをペットボトルの中に手を使わずに入れるというもので、とても盛り上がりました。

次は、日本の文化紹介として、書道、けん玉、折紙、あやとりをチームごとに分かれて、紹介しました。インドネシアの学生には全て新鮮なものだったようで、楽しんでくれました。その後は、大学内の学食に行き、昼食をとり、大学内を散策しました。学食は75円程でナシゴレン（インドネシアのソウルフード）が食べられるというとてもリーズナブルの価格設定でした。昼食後の散策では、インドネシアの学生と日本とインドネシアの文化、違いなどをたくさん話しました。また、大学内には猫がたくさんいました。インドネシアでは余った食事を猫や犬に与えるそうで、人懐っこい猫もたくさんいてとてもかわいかったです。

9月8日（3日目）@マカッサル　　担当：三宅 希実

早いものでもう3日目。マカッサルでのシティーステイは、ホテルも冷房やバス・トイレ、水やアメニティ類の充実した想像していたよりずっと快適なもので、不便なく毎日を暮らしていました。マカッサルで驚いたのはサークルｋの多さ。日本では見つけるほうが大変なくらいの絶滅危惧種であるサークルｋが、ここマカッサルではやたらと多い。ホテルの近くにもあって、3日目の朝、すこし早起きした4回生コンビ（私とななこ姉さん）はサークルｋにタピオカチャレンジ（タピオカ購入）をしに行きました。しかし言葉の壁は厚く、結局出てきたのは「メロンジュース」。後から知って爆笑したのが、メニュー表に「メロンジュース」なんてなかったこと。初海外のコンビニで、タピオカ頼んだはずが裏メニュー（？）のメロンジュースが出てきた。これは結構一生の思い出かな（笑）

そうこうしているうちにハサヌディン大学のみんながホテルまでペテペテ（乗り合いバス）で迎えに来てくれました。しかしこの乗ったペテペテが凄かった。後々「爆音ペテペテ」という名で語り継がれるこのペテペテは、同乗者どうしの会話もままならないくらい大音量の音楽が流れていました。聞くところによると、日本でいうところの”演歌”や”懐メロ”が流れていたらしい。開いた窓から外を見れば、スクーター4人乗りで学校の送り迎えをしている親子さんたちで溢れかえっていて、信号もなく、視覚と聴覚からくる混沌ぶりに海外を実感。手をふれば手を振り返してくれる子供たちの可愛さもやばかったです。

最初に連れてきて貰ったのはバッラロンポアという現地の昔の家を遺した博物館。博物館ではピチャ先生のガイドのもと、いろんな資料を見て難しかったけど楽しい時間を過ごしました。アルさんと彼女さんのハイクオリティな動画を見せてもらったのも思い出深い。しかもなんとそれをYouTubeに挙げていると。カップルユーチューバーアルさんの動画に終始い～な～い～な～ってみんなで言ってました（笑）

昼食は「チョトマカッサル」。牛肉のスープで、後から笹でくるまれてた団子みたいなのを入れるんだけどこれがもうめちゃくちゃおいしい。見た目は灰色と茶色の中間みたいな感じで今流行りのインスタ映えとは程遠いんだけど、そんなの関係ないんだよ。おいしいものには。「チョトマカッサル」の「チョト」と日本語の「ちょっと」で「チョットだけマカッサル～」てギャグ言い合ってるのもすごく平和でした（笑）

ロターダム城というお城の跡地ではなんやかんやでトランプしたりしりとりしたり、猫と戯れたり、のんびりと過ぎた時間が本当に良かった。罰ゲームでアルさんが歌った秦基博のドラえもんの曲もよかった。また、おやつに食べた「ピサンエピ」というバナナに削ったチョコやチーズをまぶしたデザートは私のなかでのベストオブインドネシアおやつ。ほんとうにおいしい。これも例にならって全くインスタ映えしない見た目なんだけど、店開いて日本で普及したいくらいにはおいしかったです。余生はピサンエピ屋で過ごそうかな～。

最後に向かったのはロサリビーチ。広場のようなところには結構人があふれかえっていて、有名な観光地のよう。ここで見た夕陽が印象的で凄く綺麗。

ね。これぞインスタ映え。

インスタ映えって言葉で形容したくないくらいなんかこう胸に来るものがあったというか、たった二日という短い間だったけど、ハサヌディン大学のみんなと過ごした時間は本当に心が洗われる気持ちでした。マカッサル@余韻。本当にテリマカシー。

よく笑い、素直でまっすぐなハサヌディン大学のみんなと過ごす時間はほんとうに気持ちがよかった。こういう綺麗な人間関係って久しぶりだなって思いました。日本じゃ複雑になりすぎてる感 is ある。素直に笑って、素直に楽しいことして。そんな当たり前をやさしく思い出させてくれる、めちゃいい経験でした。あ～こんなこと書いてたらまた会いたくなるな、みんなに。

9月9日（4日目）マカッサル → トラジャ　　担当：葛原和希

この日は朝 8 時にマカッサルのホテルを出発してトラジャ地方のサダン村に向かいました。

車で約 10 時間山道に揺られながらマカッサルから段々と景色が変わっていくのを楽しみました。出発してから 5 時間ほど経ったころにはすっかり山道になり、道路があまり舗装されていなかったため車がとても揺れました。外には野生のニワトリや犬などがたくさんいて日本ではあまりない光景でした。

途中エンレカンのノナ山が一望できるカフェに寄りました。ノナはインドネシア語で「女性」という意味があるそうです。見渡す限り山と空で、長時間の移動の疲れが吹き飛びました。自然のままの山々が連なっている光景は圧巻でした。そこで皆でコーヒーと紅茶を飲みました。写真の左下の食べ物はバナナを揚げたもので、外はカリカリで中はバナナの甘みが詰まっているコーヒーに合う一品でした。その後も移動を続けてサダン村いついたのは午後 7 時頃でした。街灯がないため真っ暗にもかかわらず、子供たちと村長さんが出迎えてくれました。そのままご飯を頂き、トラジャの伝統的な建物であるトンコナンに泊まりました。中はとても快適で、秘密基地のようでした。ただ、シャワーを貸していただいたのですが冷水しか出ないそうで温水に慣れていた私たちは寒がりながらお風呂に入りました。

9 月 10 日（5 日目）@トラジャ　　担当：唐井優利花

トラジャ地方、サダン村に到着して最初の朝を迎えた。食事は屋外でテーブルを囲って、ビュッフェ形式でいただく。犬が苦手な私にとっては、放し飼いの犬が何匹も足元や周りをウロウロしている状況が信じられない。ニワトリも列をなしている。トラジャに来て 1 日目の朝食である。

この日のスケジュールは、パラワ村で屋根の竹製のトンコナンの見学→お葬式の一部である、水牛の屠殺の見学→ケテケス村でトンコナン、お墓見学だ。

この日はお葬式に行くということで、みんな黒い服をまとって一日過ごした。トラジャ Ex. のメーンイベントである水牛さんとの対面に緊張のような、複雑な気持ちを抱いたことを今でも覚えている。

パラワ村では、この村ならではの竹製の屋根のトンコナンの見学と同時に、マルセルさんやバルバラさんからトラジャ族の考え方などトラジャ族について話を伺った。トラジャに来て初めての買い物で、ひとクセある買い物だったことも忘れてはいけない。

屠殺の見学は、私がトラジャ Ex.を知ってからずっと気になっていた、私の中で最大のイベントだ。私たちのほかにもお葬式の見物客は大勢来場していた。亡くなった方の近しい方々は、亡くなった方の顔写真が印刷された T シャツを着るなど、なんだか異様なムード。司会者の方がマイクを持ち、進行する。亡くなった方の家族から振舞われたコーヒーとお菓子を口にしながら、牛はいつになったら…と会場に到着してから 1 時間弱、ついにその瞬間!!!!!いろんなことを考えさせられた。お葬式のために生きるといっても過言ではないトラジャの人々、世界には沢山の考えや文化が散在していること。お葬式を通して考えたこと、学んだことを大切にしたい。そして 20 頭ほどの屠殺を見学して、私たちは昼食へと向かった。こんなにも食欲のないままいただく食事は初めてだったこと、忘れられない。

ケテケス村は、彫り物が有名な村。トンコナンの壁の緻密な模様はこの村で生み出されている。トンコナンを見た後、カラフルな布製品がいくつも連なっている通りを抜けて、お墓の見学だ。身分によってお墓の形が違うこと、日本では見たこともないお墓の姿、部外者によるお墓の操作などなどたくさんのことを学んだ。ケテケス村を出る際に、原田ひろとくんが村の子どもにからかわれていたこと、忘れようにも忘れられない。

サダン村に戻り、サダン村の子どもたちと初めて交流。子どもたちは元気いっぱいで大学生は圧倒されるばかり。初めて尽くしの濃密な 1 日が終わった。

9 月 11 日（6 日目）@トラジャ　　担当：福森大祐

６日目の朝も昨日と同じくトンコーナンからスタート。朝は日向にいないとめっちゃ寒いです。６日目はおもに水牛市場見学と孤児院に行きました。

最初の目的地に着いて、まず食べ物の市場を歩きました。唐辛子とか野菜、果物がたくさんあってカラフルな市場でした。印象に残ってるのは干物のエリアです。臭くて気分が悪くなりそうでした。バナナの天ぷらはどこに行っても売っていますね。親しみのある食べ物なんでしょう。写真に唐辛子が写っていますね。あれえげつないほど辛いらしいです。そういえば二日目の夕食の時、唐辛子一本食べました。10 分ほど喋れませんでした。

そして水牛市場。テニスコート 4 つ分くらいの大きさの広場に沢山の牛がいました。牛の大きさや、肌の模様で値段が変わるそうで、一頭 1 千万するものもあるそうです。大切に育てられてるんですね。水牛とは別のスペースに豚もたくさんいました。子豚は逃げないように手足縛られていてかわいそうでした。しかも売られた子豚は生きたまま袋に入れられそのままトラックへ・・・

市場を見学した後、昼食をとり、孤児院を訪問しました。孤児院では、8 人の子供たちによる楽器演奏を聴いたり、一緒に遊んだりしました。楽器演奏では蛍の光とか知ってる曲も披露してくれました。太鼓に合わせたダンスも披露してくれ、太鼓の上に乗って踊る姿は印象的でした。太鼓のドン、カッ、のリズムが独特で好きだったなぁ。フルートのような笛を一人一本渡されてみんなで練習しました。音を出すのにはコツがいって難しかったです。というか僕最後まで音出ませんでしたわ。子供達とお互い数字を覚えあってましたね。歌に合わせて覚えてましたが、果たして言えるようになったのでしょうか。ぼくは忘れました。
日本の遊びをみんなでやりたいと思い、“だるまさんがころんだ“をしました。子供達は「だるまさんがころんだ」とはなかなか言えていなかったけど、めっちゃ楽しそうでした。写真見てください。めっちゃ楽しそうでしょ。

9 月 12 日（7 日目）@トラジャ　　担当：丹原菜々子

この日は、去年マネネ祭りが行われた場所に行きました。マネネ祭りとは、お墓からミイラを取り出して、乾燥させ、綺麗に掃除をして、ミイラに着せる服を変える２、３年に１度行われるお祭りのことです。そして、マネネ祭りではお葬式同様に牛や豚も殺します。私たちは、去年の ISA メンバーが見学したマネネ祭りが行われた場所に行きました。お墓はとても山の高い場所にあり、大きな石に穴を空けて、そこに棺桶を入れていました。日本のお墓とは全く異なり、まるでお墓のマンションのようでした（写真参照）。お墓の近くには、去年のマネネ祭りで使われたトンコナンの形をした神輿や、看板のようなものが置いてありました。実際にマネネ祭りを見ることはできなかったですが、帰国したら去年の参加者に話を聞いてみたいと思います。日本では考えることのできない、トラジャの文化であるマネネ祭りのことを知り、驚くとともに、世界には様々な文化や伝統があるのだということを実感しました。

お墓に行った後は、景色の良いレストランで昼食をとり、トラジャコーヒーを買いに行きました。トラジャといえばコーヒーというほど有名なトラジャコーヒーをみんなたくさんお土産に購入していました。

その後は、ローカルな市場でお土産を買いました。トラジャの伝統織物やアクセサリー、バック、T シャツなどがたくさん売られていました。気前の良いマルセルさんは、私たちに、たくさんのお菓子を買ってくださいました。トラジャの伝統菓子は、ピーナッツを揚げたものや揚げバナナなど揚げ物が多いですが、とても美味しいです。

夜はサダン村の子ども達と遊びました。子ども達は、私たち日本人の名前を何回も言って覚えようとしてくれて、とてもとても可愛かったです。どんなこともゲームのように楽しくできる子ども達からたくさんのエネルギーをもらいました。

9 月 13 日（8 日目）@トラジャ　　担当：林ももか

今日はまずはじめに今晩のさよならパーティーでつくる焼きそばの材料を買いに市場へ行きました。キャベツ、玉ねぎ、人参を買い、ソバの代わりにミーゴレンの麺を買いました。宗教の関係で豚肉を食べられない子もいるので、今回は肉無し焼きそばに。

その後、交流をするためにトラジャの高校へ向かいました。着いて車からでるとびっくり、窓から大勢の生徒が顔を出し笑顔で手を振ってくれていました。手を振り返すと「キャーー！！」とまるでアイドルが来たかのよう笑。少し照れながらも私達は高校の中へ。教室へ向かう間もほぼ全校生徒からも熱烈な歓迎に驚きながらも嬉しい思いでいっぱいでした。

私達が交流をしたのは日本語を学んでいるクラスでした。そこでは浴衣について実際着せているところを見せながら説明しました。みんなとても真剣に聞いてくれて窓の外からは他のクラスの生徒達もたくさんのぞいていました。浴衣は二つ持って行っていたのでもう一つは現地の子に着せてあげることに。次の教室では、折り紙で鶴の作り方を教えました。結構難しくて苦戦しましたが、前でやりつつ日本人が散らばって教えてなんとか完成。言葉があまり通じないなか、私の言ったことを真似したり、辞書で調べて「(鶴が)かっこいい！」と言ってくれたりしました。最後に校長先生と挨拶して学校を後にしました。

そして、私達のホームステイ先の村に帰ってきました。これから焼きそばを作ります。とその前に、豚の解体をするという報告が。キッチンのすぐ外で生きた豚が殺され、肉になりました。刺激が強すぎて私は遠くの方で見ることしかできませんでした…。知らないだけで日本でも行われていること、生き物に感謝して食べないとなと改めて感じました。さて、気を取り直して料理再開です。トラジャスタイルで、床に畳のようなものを敷いてそこに座って野菜を切っていきます。大きな中華鍋で約 30 人前の焼きそばの完成。その後インスタントの味噌汁、緑茶も作りました。日本食が作れた後、次は現地の人がトラジャの料理を作ってくれるので完成するまで子供達と遊びタイム。子供達は本当に元気で次から次へと様々な遊びをしていくので、それについていくのが大変でもあり、とても楽しかったです！ボールを投げたり蹴ったりケイドロをしたりでヘロヘロになりながらもとても楽しい時間を過ごしました。

そしていよいよ夕食の準備ができました。先ほどの豚さんもいい具合に BBQ されて美味しく調理されていました。おのおの自分の欲しいものを取っていき食べていきます。食事が始まるとあちらこちらで「マンミリーウ！」の声が。これはトラジャ語でとても美味しい！という意味です。少し不安だったけど日本食は好評！日本人も久しぶりの日本食でホッと一息でした。おしゃべりしながら、笑いながら子供も大人もみんなで楽しめた夕食でした。こんな生活も今日で最後、明日帰ってしまうのがとっても惜しくなりました。

そして、なんと食後に村長さんからトラジャのトンコナンや水牛をあしらった木彫りの板飾りをプレゼントしていただきました。そしてガイドのお 2 人からは全員にトラジャの手作りの織物のプレゼントがありました。こんなによくしていただいてプレゼントまでいただけるなんて思ってもいなかったので本当に嬉しかったです。その後、みんなで写真を撮ってさよならパーティーは終了です。

9 月 14 日（9 日目）トラジャ → マカッサル　　担当：小泉星

トラジャ ex 最終日ということで、トラジャ族の皆んなとお別れ。ホームステイ先の家族はとても親切で、料理も美味しかったです。

そして、再び Makassar に戻るためバスに揺られながらの長時間移動。

Makassar に帰る途中の休憩場所では美しい山々があり、その山の大きさ、自然の深さに圧倒されました。壮大な景色と共に優雅なティータイム。とても素敵なひと時を過ごすことができました。

そして、Makassar に着くともう夕食の時間。マルセルさんがなんでも好きなのを頼んでいいと言われたので、メニューにあった高くて美味しそうなかつ、マンゴージュースにチョコパフェを食べました。とても美味しかったです。夕食帰りのバスではだいちゃんさんが純粋な日本人だということを知り、今までずっと疑問に思っていたことも解決できて良かったです。

トラジャ ex が終わる頃には皆の仲が深まり、充実した夏休みを過ごすことができました。マルセルさんなどのガイド、ホームステイ先の家族、ハナヌディン大学生、そしてトラジャ ex に参加した皆さん全ての人に

Terima kasih♡

【フリーテーマエッセイ】

文責　丹原菜々子

トラジャ Ex で、私たちはトラジャの文化や伝統をたくさん学びました。その中で私は、地域の文化や伝統を守り続けていくということの重要性について考えさせられました。私はトラジャに行くまでは、なぜお葬式で水牛や豚などの動物を殺すのか全く理解ができませんでした。ただ、動物がかわいそうとしか思えず、変わった文化であると思っていました。ですが、マルセルさんやバルバラさんから話を聞いたり、訪れた村のおばあちゃんが話していることを訳してもらったりしたことで、トラジャでのお葬式や亡くなった人への考え方を知りました。

「水牛は亡くなった人を天国まで連れて行ってくれる動物だということ、亡くなった人の地位によって殺される水牛の数が違うということ、たくさんの水牛を用意できれば速く天国へ行けるということ、水牛には良いものを食べさせて働かせないため一番幸せな動物だと言われていること、一頭が 1000 万円ぐらいするマダラ水牛もいること、トラジャの人はお葬式のために何年もかけて働くこと、亡くなった人を病人と呼び食事の時も横で同じように食事を並べて食べること、お葬式は 1 週間ぐらいかけてするお祭りだということ」など本当にたくさんのことを教えていただきました。今回は実際に、水牛を屠殺する祭りの見学もさせてもらいました。水牛が殺される様子を見るのは初めてだったためショッキングでずっとは見ていられませんでしたが、実際にお葬式に関係するイベントを見学させていただく貴重な経験でした。その時に遺族の人も悲しんでいる様子はなく、トラジャの人々のお葬式に対する考え方を近くで感じとることができました。現在はトラジャでは 9 割ほどがキリスト教と言われていますが、お葬式は昔のアニミス教で行っているそうです。日本で育った自分の価値観では考えられないものですが、トラジャの人が伝統のお葬式のやり方を大切にしていることを知り、少し自分の中で何か捉え方が変わりました。日本に帰ってから、トラジャのお葬式の話を周りの人にした時、「水牛がかわいそう」という言葉が返ってきました。ですが、「ただかわいそうなだけではないんだ！」と思っている自分がいました。確かにかわいそうだけれど、トラジャの人の考え方や伝統を、実際に行って見てきたからこそ、私の中で価値観が少し変わったのだと思います。

今回トラジャに行って、世界には様々な自分の知らない文化や伝統があり、それを深く知ることの面白さを実感しました。それと同時に、自分は外国の人に日本のことを正しく伝えることができるのだろうかという不安も感じました。自分が育った国や地域のことをもっと知り、自信を持って伝えられる人になりたいと思います。伝統を守り続けることは簡単ではないけれど、語り続けていくこと、そして異なる文化や伝統を尊重することは、とても大切なことであると思います。

トラジャ Ex. 3日目　9/8

文責　三宅希実

早いものでもう3日目。マカッサルでのシティーステイは、ホテルも冷房やバス・トイレ、水やアメニティ類の充実した想像していたよりずっと快適なもので、不便なく毎日を暮らしていました。マカッサルで驚いたのはサークルkの多さ。日本では見つけるほうが大変なくらいの絶滅危惧種であるサークルkが、ここマカッサルではやたらと多い。ホテルの近くにもあって、3日目の朝、すこし早起きした4回生コンビ（私とななこ姉さん）はサークルkにタピオカチャレンジ（タピオカ購入）をしに行きました。しかし言葉の壁は厚く、結局出てきたのは「メロンジュース」。後から知って爆笑したのが、メニュー表に「メロンジュース」なんてなかったこと。初海外のコンビニで、タピオカ頼んだはずが裏メニュー（？）のメロンジュースが出てきた。これは結構一生の思い出かな（笑）

そうこうしているうちにハサヌディン大学のみんながホテルまでペテペテ（乗り合いバス）で迎えに来てくれました。しかしこの乗ったペテペテが凄かった。後々「爆音ペテペテ」という名で語り継がれるこのペテペテは、同乗者どうしの会話もままならないくらい大音量の音楽が流れていました。聞くところによると、日本でいうところの”演歌”や”懐メロ”が流れていたらしい。開いた窓から外を見れば、スクーター4人乗りで学校の送り迎えをしている親子さんたちで溢れかえっていて、信号もなく、視覚と聴覚からくる混沌ぶりに海外を実感。手をふれば手を振り返してくれる子供たちの可愛さもやばかったです。

最初に連れてきて貰ったのはバッラロンポアという現地の昔の家を遺した博物館。博物館ではピチャ先生のガイドのもと、いろんな資料を見て難しかったけど楽しい時間を過ごしました。アルさんと彼女さんのハイクオリティな動画を見せてもらったのも思い出深い。しかもなんとそれを YouTube に挙げていると。カップルユーチューバーアルさんの動画に終始い～な～い～な～ってみんなで言ってました（笑）

昼食は「チョトマカッサル」。牛肉のスープで、後から笹でくるまれてた団子みたいなのを入れるんだけどこれがもうめちゃくちゃおいしい。見た目は灰色と茶色の中間みたいな感じで今流行りのインスタ映えとは程遠いんだけど、そんなの関係ないんだよ。おいしいものには。「チョトマカッサル」の「チョト」と日本語の「ちょっと」で「チョットだけマカッサル～」てギャグ言い合ってるのもすごく平和でした（笑）

ロターダム城というお城の跡地ではなんやかんやでトランプしたりしりとりしたり、猫と戯れたり、のんびりと過ぎた時間が本当に良かった。罰ゲームでアルさんが歌った秦基博のドラえもんの曲もよかった。また、おやつに食べた「ピサンエピ」というバナナに削ったチョコやチーズをまぶしたデザートは私のなかでのベストオブインドネシアおやつ。ほんとうにおいしい。これも例にならって全くインスタ映えしない見た目なんだけど、店開いて日本で普及したいくらいにはおいしかったです。余生はピサンエピ屋で過ごそうかな～。

最後に向かったのはロサリビーチ。広場のようなところには結構人があふれかえっていて、有名な観光地のよう。ここで見た夕陽が印象的で凄く綺麗。地平線すれすれに赤い夕陽が浮かんでて、これぞインスタ映え！いや、インスタ映えって言葉で形容したくないくらいなんかこう胸に来るものがあったというか、たった二日という短い間だったけど、ハサヌディン大学のみんなと過ごした時間は本当に心が洗われる気持ちでした。マカッサル@余韻。本当にテリマカシー。

よく笑い、素直でまっすぐなハサヌディン大学のみんなと過ごす時間はほんとうに気持ちがよかった。こういう綺麗な人間関係って久しぶりだなって思いました。日本じゃ複雑になりすぎてる感 is ある。素直に笑って、素直に楽しいことして。そんな当たり前をやさしく思い出させてくれる、めちゃいい経験でした。あ～こんなこと書いてたらまた会いたくなるな、みんなに。

普段出来ない経験

文責　吉田庄吾

海外旅行ってなると、やっぱり日本人はアメリカとかヨーロッパに行きたくなると思う。それは、よくテレビでやってるしメデイアの影響ってのもあると思うけど、治安がいいとか、ご飯が美味しいとか、素晴らしい建造物があるからとか、色々だと思う。もちろんとてもいい場所だし、自分も一度は行きたい、いや絶対行く。じゃあ何で自分がそういった国とは正反対のトラジャ Ex に行こうと思ったのか。きっかけは去年 1 カ月滞在したフィリピン。国民性なのか、みんないい意味でテキトーというか、道路穴ボコだらけだし、ゴミそこらじゅうに落ちてるし。でもみんな気にせず生きてるし、子供も沢山いて毎日楽しそうに生活してる。発展途上国だから、昔からある文化とか風習とか、近代化されてないが故に残ってるものも沢山ある。そういうものって、普段日本人がよく行く国じゃ体験出来ないと思う。トラジャ Ex で行く場所はそういう意味ではとても顕著な場所で、昔からある独特な生活が根強く残っている。だから行こうと思った。

いざ行ってみて、最初の数日間は割とインドネシアでも都会の方で過ごして、現地の大学生と交流して色々学べてとても楽しかった。とにかく交通事情が日本と違いすぎて驚いた。トラジャ地方に突入してからは、本当に毎日が刺激的だった。まず家がすごい形だし、野放しにされてる動物めっちゃいるし、お葬式も日本と全く違うし、豚殺したり水牛殺したり色々残酷なものも見たけど、現地の人からしたらこれが日常で、本当に本当にカルチャーショックの連続だった。こんな経験普通の旅行ではまず絶対に出来ないし、貴重な経験だったと思う。日本での生活と比べたらもちろん不便だけど、それが良い。ただ絶対にちゃんとしたコーディネーターは必要だと思う。やっぱり治安っていう意味では先進国よりも劣ってるし、頼れる現地の人がいないとしんどい。でもインドネシアを始めほとんどの東南アジアの国は物価がめっちゃ安いからそこは何とかなると思う。だから、お金がない学生のうちはアメリカとかヨーロッパ行かずに、東南アジアとか行ったらいい。本当に自分はトラジャ Ex でいい経験が出来たし、同じ場所じゃなくてもどこでもいいからまた東南アジアに来たいと思う。まあ一緒に行くメンツはとても重要だけど。今回は自分が団長で、みんな良い人が揃って本当に良かった。ありがとうございました。

言葉

文責　唐井優利花

私はトラジャ Ex.に参加して、言葉について考えさせられた。インドネシアでは、部族によって異なる言葉をもつ。例えば、今回お世話になったトラジャ族はトラジャ語、ブギス族はブギス語、ゴワ族はゴワ語というように、インドネシアには様々な民族が存在し、異なる言語を持つ。これらは、ハサヌディン大学の皆さんとの交流を通して知ったことである。私は当初、「言葉が違う」ということを日本でいう方言のようなものかと思っていたが、全く違っていた。そして、彼らが異なる部族の人と話すときは、インドネシア語という共通語を使うらしい。日本には方言があるくらいで、日本全国どこでも「日本語」が話されている。同じ国の中で、違う言葉が話されているなんて、日本で生まれ育った私にとっては考えられないことだった。また、異なる民族が共存することも、日本では考えられないことだ。インドネシアには、異なる民族が一つの国に存在するからこそ、「ひと」がそれぞれ「異なる」ことは当たり前だとしているのかと、今回トラジャ Ex.に参加して、関わらせていただいた方々を見て感じた。日本人は自分とは異なる方言を耳にするだけで、ちょっとした違和感があるのではないか。日本のように日本語という一つの言葉だけ用いる国が当たり前でないことを日本人は認識するべきだと思う。トピックから逸れるが、個人的最大の驚きは、インドネシア国内で部族によって言葉が異なることのほかに、文化や宗教が違うことだ。同じ国なのに…、と驚愕を隠せないでいるが、それは日本という島国での生活ゆえに、そう思ってしまっているだけだ。私は自分自身を省みて、多民族な社会にもっと寛容になるべきだと思った。

以下は、今回のトラジャ Ex.でお世話になった方々から言葉に関して感じたことを記そうと思う。

まずはハサヌディン大学の皆さんから感じたこと。彼らは私たちのマカッサル滞在を完璧なまでサポートしてくださった。彼らはマカッサルを観光する時や移動の時、大学構内を見学する時など、いつでも我々と言葉を交わしてくれていた。そして何より驚いたのが、日本語という外国語が巧みなことだ。しかし、彼らは大学生になってから日本語の勉強を始めたというにもかかわらず…。いかに彼らが勉強熱心であるかが窺えた。私は、大学での専攻は何かと聞かれると「英語」と答える。しかし、同じように言語を学んでいる彼らのように自信をもって自分の専攻を語れるほど、私は学びに徹することができてないのではないかと考えさせられた。同じ学生であることを通して、私は彼らから自身を見つめ直す機会をもらったことにとても感謝している。

次はトラジャでお世話になった、サダン村の皆さんから感じたこと。今回のトラジャ Ex.の参加にあたって、インドネシア語をたくさん覚えていなかったことは交流する上での失態であるが、その上トラジャ語での交流は皆無の状態だった。マカッサルでは、ハサヌディン大学の皆さんとの交流手段は「日本語」であり、私は不自由なく話ができていた。しかし、トラジャ語が使われるトラジャに来ると「日本語」なんてもってのほかだ。マルセルさんとバルバラさんなしではサダン村の皆さんと会話ができなかった。現地の言葉を話せることの大切さを思い知った。せめてインドネシア語を理解していたら、もっと交流は深まっただろうし、貴重なお話も聞けただろう。「言葉」は「ツール」とよく聞くが、ほんとうにその通りだと思った。言葉を知っていることでより大きな交流ができることを改めて感じた。教養としての言葉でなく、ツールとしての言葉学習に励みたいと思った。

言葉に関して今までにない衝撃や歯がゆさや悔しさを味わったトラジャ Ex.は私の中で貴重な経験となり、今後の励みとなる。この経験を忘れることなく、これからの勉学に努めたい。

文責　原田寛人

まず、海外旅行（研修？）大変だった。（笑）

初海外ではないが、“物心ついてから”というカウントならば、初海外。

ガイドさんや現地学生と一緒にいるときは安心だが、たまに一人になったときや、空港の手続きは、ちょっとした不安が付きまとう。せめて、英語はもうちょい話せたい…

Toraja Ex.といえば、お葬式！と思ってこのプログラムに参加したが、やっぱりお葬式の印象が強く残っている。もっと具体的に言うなら、葬式の水牛を殺す映像が脳裏に焼き付いた。本当に日本では感じられないだろう雰囲気を感じられた。去年の Toraja Ex.では水牛を殺すところは見れなかったそうなので、見ることができた幸運に感謝だ。

まったく別の話をする。コーカサスオオカブトのことだ。子供のころ、こんなカブトムシを捕まえてみたい、触りたい、飼いたいと思っていた。そいつがいた。コタン村に。このプログラムで一番うれしい出来事だった。実は、インドネシアに行く前に、昆虫を日本に持ちかえる方法がないか調べていた。結局、その夢は叶わなかった。

文責　福森大祐

みなさんこんにちは。それではトラジャ Ex.はどんな感じやったか、喋りますね。まずトラジャとはどこなのか。僕も申し込んだときはどこなのか正直知りませんでした。そんなもんです。Ex.参加なんてノリです。まあ I.S.A.に入ったからには、なにか Ex.に参加したいと思ってました。で、せっかく海外行くんだったら、マニアックなところ行こうって事でトラジャ Ex.を選びました。すいません話が逸れました。えっと、トラジャはインドネシアのスラウェシ島という島の中央の山岳地帯にある地域です。スラウェシ島の空港から車で 9 時間くらいでした。インドネシアと聞くとバリ島とかジャワ島とかが有名なんで、ここにいく機会ってのはあんまりないかもですね。

インドネシア語とトラジャ語です。もちろん喋れません。でも Ex.コーディネーターのマルセルさんは言語ペラペラで通訳と説明をしてくれたのでコミニュケーションでのストレスは感じなかったです。なので英語はほとんど使いません。空港とかでちょっと使うだけです。海外行きたくて、でも英語自信ない人はオススメですよ。あと、交流した現地の大学生たちも日本語を勉強している人たちでした。なので、コミュニケーションにおいてストレスはなく、彼らとともにお互いの言語を楽しむことができました。トラジャ Ex. は、海外に行きたい、でも英語ができなくて不安って人におすすめのプログラムだと言えますね。

移動の途中、カフェへ立ち寄ったのですが、カフェのカウンターから巨大な山岳を見渡すことができ、その光景は壮観でした。こんな、トラジャ Ex. だからこそ見られる、スケールの大きな風景がたくさんあるので、写真を撮ることが好きな人にもこの Ex. はおすすめです。ぼくはこの Ex. の風景を共有したくて、ためらっていたインスタグラムを始めました。

インスタグラムは向こうの大学生も使っていて、いまでもたまに連絡を取り合っています。インスタグラムだと写真とか動画の投稿だから、国が違っても相手のことがよくわかるし見ていて楽しいですね。これからも海外で友達を作ったら、どんどん SNS を使っていきたいです。

このトラジャ Ex.が僕初海外だったんですけど、9 日間が非日常な毎日で、“楽しかった”の一言で済まされない Ex.でした。行きの飛行機は一人だったし、キャリーケースは空港に無い不安なとこから始まりました。大学生との楽しかった交流を通して視野が広がったし、彼らとの別れは寂しかった。村への移動や夜の寒さは過酷だったが、文化見学・体験を通して知見を得た。互いのことをほとんど知らなかった Ex.参加者とは 9 日間で中が深まりとても楽しい時間を過ごせた。Ex.コーディネーターのマルセルさんと付き添いのバルバラさん、運転手さん、ハサヌディン大学の学生、サダン村の人たちそしてなにより Ex.の参加者のみんなのおかげで忘れられない Ex.になりました。

トラジャ Ex.を通して

文責　葛原和希

先日、10 日間のトラジャ Ex.が終了しました。トラジャ Ex を通して一番私の価値観が変わったのはサダン村での生活でした。トラジャのことを調べてみると、生と死を相対的なものとして捉え、アニミズムを信仰しているとあり、よく意味が分からないでいました。しかし実際にトラジャで生活していく中で段々とそれらの意味を肌で感じることになりました。中でも一番強く印象に残ったのが現地の人たちと私の死生観の違いでした。私たちはツアーの中で牛を葬式のために殺す場面を見て、彼らの葬式について教えてもらいました。トラジャでは人が亡くなると葬式をする準備をします。その準備とは牛を買い集めることです。牛は死者が天国にたどり着けるための乗り物であり、葬式の前日に殺されます。その間、長い時には何十年も死者は家に置かれ「病人」として扱われます。その時点ではまだ死んでいることにはならないそうです。ここに私たちと現地の人々の価値観のちがいを感じました。私はトラジャではこの世のあらゆる物体は精神と肉体に分かれているという考え方があるのかと思いました。だから肉体が死を迎えても精神は天国へと旅立つまで肉体に残り続けるし、葬式用の牛が殺された後普通に食べられるのは、必要なのは牛の魂であるからと捉えることができます。そして、あらゆるものに精神があるという考え方はアニミズムにもつながります。私は動物の思考は脳による電気信号によって成り立っていると考えていたため、そのような精神といった生物的なものを信じる彼らと交流したことは私にとってとても大きな出来事でした。

また、もう一つ感じた死生観の違いは、私たちは死を当たり前のものと思わなくなっていることです。この世のあらゆる生き物は必ず死を迎えます。しかし、私たちは医療の発展や食料を自分で調達しなくなったことから死を身近なものとして感じなくなっていると私は感じました。実際牛たちが殺されるとき、私たちは「かわいそう」と感じましたが、現地の人々はみじんもそのように思っていなさそうでした。精神は死なないという考えがあるためなのかはわかりませんが、少なくとも私たちよりは死を身近に感じ、常に死と向き合っているからという理由もあると思いました。それが生と死を相対的にとらえることなのだと感じました。

このようにトラジャ Ex.は私にいろいろな考え方を示してくれました。この経験を大切にしたいと思います。

トラジャ Ex.

文責　小泉星

私は今回初めて ISA のプログラムに参加した。約 2 週間という短い時間であったがインドネシアに滞在したことで、視野が広がり、価値観を変わった。インドネシアは自然が豊かで辺り一面に広がる田んぼや山々があったり、高床式の伝統あるトンコナンに泊まったり、死を第一と考えるトラジャ族の葬式の見学をしたりと非日常的な経験をすることができた。中でも一番学ばせてもらったことは人との関わりである。インドネシアはイスラム教が約 8 割、キリスト教は 1 割を占めている。しかし、違う宗教の人がいても互いに認め合い、分け隔てなく優しく接していた。日本人である私にもフレンドリーに話しかけてくれ、宗教以前に同じ人間だということを思い知らされた。私は現地の人と関わったことで人の温かさに触れることができた。以下に交流を通して学んだことを述べる。

私は日本語を勉強している大学と高校を訪問し、お互いの文化紹介をした。日本人側は書道や浴衣、あやとり、けん玉を実際学生に体験させた。私は浴衣を着て、書道の体験をさせたのだが、学生一人一人が一生懸命に取り組み、楽しんでくれたのでとても嬉しかった。

またトラジャ族という民族の家にホームステイした際、小学生とも交友関係を深めた。子どもたちは一緒に遊ぼうと積極的に話しかけてくれたり、一生懸命日本語を覚えようとしてくれた。そして孤児院にも訪問した。孤児院というと暗いイメージを持ちがちだが、彼らは民族の踊りとともに温かく迎え入れてくれた。子どもたちに民族の楽器のやり方を教えてもらったり、一緒にだるまさんが転んだをしたりした。トラジャ語の数字を教えてもらった際には私は 2 と 4 を毎回間違えて笑われた。私の無邪気な笑顔を見て、孤児院の子どもだから明るく振舞わなければと思うのではなく、誰に対しても平等に接するべきだと考え方を変えさせられた。

私は現地の人と交流することで、外国人にもっと日本の良さを知ってもらいたい、好きになってもらいたいと思うようになった。そのためにまず英語を勉強し、日本の観光名所や文化などもしっかり学び、日本と外国人の架け橋となれるように努めていきたい。

トラジャ Ex.で出会った人たち

文責　林ももか

今回のトラジャ Ex.で私はたくさんの体験ができ、たくさんのものを得ることができました。その中でも私が本当に大切にしたいのは出会った人々です。私は今回の旅でたくさんの人と出会いました。

1 日目の夜からホテルに来てくれたハサヌディン大学の皆さんとは、2 日目の大学紹介、3日目の観光を通して本当に仲良くなりました。みんなが積極的に日本語です話しかけてくれて、たくさん話し、たくさん遊び、たくさん歌い、たくさん笑いました。リーダーのピッチャが最初にガイドじゃなくて友達になりたいと言っていましたが、その通り私達は友達になれました。また、同年代の彼らが日本語の勉強を頑張っているのを知り、同じ大学生としてとても刺激を受けました。インドネシアという日本とは大きく違い慣れない環境の中で、彼らがいたから笑顔の絶えないトラジャ Ex.になったと思います。プログラム終了後、空港まで見送りに来てくれたのはとても嬉しかったです。今でも Instagram などでメッセージを送ってくれたりしていて、この出会いはずっと大切にしていきたいと思います。

トラジャへ移動してもたくさんの人と関わりました。ホームステイ先の村の村長さん、お母さん、おばあちゃん、子供達、(犬…)。彼らは快く私達を迎え入れてくれました。ハサヌディン大学の皆さんとは違い、言葉は通じないのでマルセルさんに簡単な言葉を教えてもらい伝えるととても喜んでくれたので私もとても嬉しかったです。子供達は本当に可愛くて可愛くてとても元気でした。彼らから見ると見慣れない日本人のはずですが、物怖じすることなくうるさいほどに話しかけてくれました。発音しづらい日本人の名前を必死に覚えようとしてくれたことがとても嬉しかったです。子供達とはいっぱい遊びました。言葉は通じないけど一緒に走り回って汗をかいて、とても仲良くなれました。日中はトラジャでいろんなところに行って疲れていましたが、私は毎晩子供達が遊びに来てくれるのが楽しみでした。

最後に今回の Ex.中ずっと一緒にいてくれたマルセルさん、トラジャで大変お世話になったバルバラさん、そして長旅を支えてくれた運転手さん達です。みんなとても優しくてフレンドリーな方で、疲れているところを見せず私達が楽しめるようにトラジャ Ex.を進めてくれました。彼らなしではこんなに楽しい旅にはなりませんでした。それどころか、旅自体が成り立たなかったと思いますが…。マルセルさん、バルバラさんはガイドとしてたくさんの事を教えてくれました。インドネシア、トラジャでの体験は初めてのことばかりで知らないことだらけだったので、たくさん質問したりしても嫌な顔一つせず分かりやすく教えてくれました。彼らがいるととても安心できました。

このようにトラジャ Ex.を通してたくさんの人々出会いました。他にも道を通ると手を振ってくれる人々、店であった人々など多くの人々に迎え入れられました。これらの出会いを忘れずにこれからも大切にしていきたいです。

【持ち物推奨品】

お土産	コーディネーターさん、現地の大学生の皆さん、ホームステイ先に皆さんに。たくさんあるとよい。
トイレットペーパー	あると便利。現地のトイレにはないこともある。
長袖、長ズボン	トラジャの夜は想像以上に寒い。冬服くらいがちょうどよいくらい。
洗濯用品	トラジャでは洗濯可能。石鹸、ロープ、洗濯ばさみ、ハンガーなど一式あるとよい。
常備薬	虫刺されのかゆみ止め、胃薬、整腸剤、下痢止め。
乾燥対策用品	9月はインドネシアは乾燥している。カサカサに注意。

【注意点】

トラジャの夜はとても寒い。

食事は無理して食さない。

インドネシアのマナーに気を付ける。

トラジャ Ex.　報告書

編集責任者　唐井優利花

発 行 日　2018 年 10 月 29 日

発 行 元　International Student Association(日本国際学生協会)